



episode 41 幼い私に、死後の世界と地獄の世界を教えてくれた“そうべえ”

投稿者 吉田 絢 さま(京都府)

小さい頃から絵本が大好きだった。

幼稚園が休みの日には必ず、母と近くの図書館まで行き、貸出冊数の上限まで絵本を借りて帰った。というのも、母はわたしが幼稚園に上がる前から、毎晩絵本の読み聞かせをしてくれていたからだ。母の声と共に、お気に入りの絵本をめくる。そのうち眠気がやってきて、母にお腹をトントンされながら眠る。それが次の日も、そのまた次の日も続いた。言うまでもなく、わたしにとって至福の時間だった。

特にお気に入りの絵本は、たじまゆきひこ作『じごくのそうべえ』だった。

『じごくのそうべえ』はわたしに死後の世界、特に地獄の世界を面白おかしく教えてくれた。

そうべえと愉快な仲間たちは力を合わせて、針山、熱の釜、ふんによろ地獄など、地獄の様々な困難に明るく立ち向かっていく。

関西弁で進むリズムカルな言葉は、吉本新喜劇を観て育ったわたしにとって親しみやすいものだった。

一人でも、何度も何度も読み返し、ついに、

「とざい、とうざい。かるわざしのそうべえ、一世一代のかるわざでござあい。」は暗唱できるようになった。

そんなある日、祖母の飼っていた愛犬パクがこの世を去った。可愛いパクの死に、家族はみんな悲しみに暮れた。

幼いながらに、パクが死んだこと、そしてもうパクは、ここにはいないということが分かったわたしは、神妙な面持ちで家族に向かってこう言った。「パク、ふんによろ地獄に行ってもたん…？」

天国にいたパクも、さぞ驚いたことだろう。家族は思わず、大笑い。

そうべえは、わたしだけではなく、わたしの家族みんなを笑顔にしてくれたのだった。

あれから二十年ほど経ち、わたしも結婚をした。

夫からの今年のホワイトデーは、わたしがリクエストした『花見じゃそうべえ』。

待ちに待ったそうべえの最新作だ。

読み終えてしばらく経つが、今もリビングに飾っている。

これからも家族みんなの愛読書として、読み継いでいきたい。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2024」投稿作品より



『じごくのそうべえ』桂米朝・上方落語・地獄八景より
たじまゆきひこ 作
童心社 1978年

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



初版出版から10年経って、火が付いた！

とざい とうざい。かるわざしの そうべえ。
いっせいいちだいの かるわざでござあい。

おなじみの口上から物語がはじまる『じごくのそうべえ』シリーズは、軽妙な関西弁のテンポの良さで、時代を超えて令和の現代でも、日本全国民に親しまれています。

ところが、初版が出版された1978（昭和53）年当時は、全く売れなかったといえます。「品がない」「色がどぎつい」「子どものための本ではない」と酷評されただけでなく、子どもを冒涇するものだとキャンペーンまで起こったと、作者の田島征彦氏は回顧しています。

「そうべえブーム」に火が付いたのは、初版出版から10年が経ってからなのです。48年経った今では、シリーズは全7作となり、累計130万部を超えるロングセラーとなっています。



人間国宝が復活させた上方落語が原案です

『じごくのそうべえ』は、上方落語^{じごくばっけいもうじやの}「地獄八景亡者戯^{たわむれ}」を、のちに人間国宝となった三代目桂米朝師匠が掘り起こし、仕立て直したものが原案となっています。「地獄八景亡者戯」といえば、上方落語屈指の長編ネタです。その原典は、1839（天保10）年、安遊山人 作『はなしの種』という上方出来の小咄本的一篇「玉助めいどの抜道」に当たり、桂米朝氏の調査では「地獄八景」が文字で見られる一番古いものと示されています。

明治のころの東京では、「地獄めぐり」として演じられていました。戦後になって三代目桂米朝氏が、笑福亭福松氏より受け継いだ噺に、思い切った改良を加えて復活させ、より近代的なくすぐりの多いものに変えて、一世のヒット作「地獄八景亡者戯」となりました。



原案を翻案した創作過程がスゴイ！

上方落語「地獄八景亡者戯」を原案とする『じごく

のそうべえ』ですが、落語では1時間を超える長編作を田島征彦氏は、子どもたちが楽しみやすいよう、独自に翻案して創作絵本にしました。つまり、話術で人を笑わせる落語を、そのまま絵本にするのではなく、落語を聴いて浮かんだイメージを絵で表現したのです。

翻案・創作にあたって田島氏は、米朝落語の大判レコードを買い、それをカセットテープに録音して何か月もの間、何度も聴いたと述懐しています。一日中落語を聴きながら、地獄の絵を描く作業を繰り返しているのです。

「ことばは、ほくの身体のなかにはいつているから、文字なしの絵本をつくり、出版間際にことばを入れた」と述べているように、落語を元に絵本の世界へ換骨奪胎し、そうべえを主人公と設定して、一貫した回生の物語に構成し直したのです。



模索して身に付けた型絵染の世界

初版出版当初、「色がどぎつい」と評された絵は、染色上の型絵染という斬新で、独特な手法で製作されています。のち、平成時代に入ったころには、この色使いや造形が芸術的評価を受けるのです。

日本の伝統技では「型染」といいますが、型染の人間国宝になった師匠・稲垣稔次郎氏が創った「型絵染」を継承しているのです。その技法は、日本の伝統文化に根差しつつ、新しい挑戦と創造で常に進化させながら、力強い躍動感をあますことなく表現しています。

画家・絵本作家として先にデビューした双子の弟・田島征三氏とは全く違うものを創らなければという至上命令があり、型絵染を通して画の世界を模索していった結果の表現方法は、田島征彦氏独自の技法として確立されました。

文献

- 1) 田島征彦, 田島征三ほか：激しく創った!! 田島征彦と田島征三の半世紀, メディアリンクス・ジャパン, 東京, p.185, 237, 2006.
- 2) 桂米朝：上方落語 桂米朝コレクション2 奇想天外, 筑摩書房, 東京, pp.8-14, 2002.